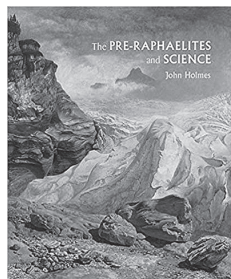


## 書 評

John Holmes, *The Pre-Raphaelites and Science*  
(New Haven: Yale University Press, 2018)



吉本 和弘

ラファエル前派の研究書といえばダンテ・ゲイブリエル・ロセッティかジョン・エヴェレット・ミレイの描いた美女が表紙を飾り読者を誘惑するというのがお決まりなのだろうが、本書のカバーはジョン・ブレットが描いた写真のように緻密な氷河の絵であり、裏側はオックスフォード大学博物館に並ぶガリレオ・ガリレイ、アイザック・ニュートン、チャールズ・ダーウィンの彫像の写真になっている。タイトルページにはシダの彫刻の写真が配され、その後の口絵にやっと見開きでミレイの《オフィーリア》が漂っている。このデザインが本書の独自性を見事に表現している。ラファエル前派のマニフェストにおいて、「科学」に範をおきながら正確な観察を実践することこそが自然と人間の新たな芸術表現に繋がると宣言されているにも関わらず、「科学」を切り口としたラファエル前派研究はこれまで盲点だった。ラファエル前派の擁護者ジョン・ラスキンの「自然に忠実に」という言葉はしばしば引用されるが、「忠実」であることがどのように「科学」的であるのかの検証はなされてこなかったのだ。そこで著者ホームズは本書で、絵画や詩だけでなく彫刻や建築にも目を向け、具体的にどの学問分野が意識され、技法としてどう作品に反映されたのかを丹念に叙述する。

著者も注意を促しているように、ラファエル前派の使う「科学」という言葉の意味は現代人が考えるものとはかなり異なっていた。彼らにとって「科学」とは、フランシス・ベーコンの哲学と科学の使命は神の創造物の探究だとする「自然神学」(‘natural theology’)に基づきながら、それぞれの学問的实践手法やそこから得られた知識や理論を尊重し、権威や既成の理論に囚われず自らが実際に行う実験と観察のみを徹底的に信じるという姿勢

である。そして本書の重要な論点の一つは、ダーウィンの「進化論」の出現が「科学」と「神」の関係性に激変を与え、「自然神学」から、宗教を科学から排除しようとする「科学的自然主義」(‘scientific naturalism’)へと移行させたことが、ラファエル前派の世代交代にも大きく影響し、第二世代が「科学」への信奉を捨てることになった(ように見える)点である。それは『種の起源』発表の1859年を節目として本書が大きく二部構成になっていることにも反映されている。

前半の第一章では、ラファエル前派芸術家たちが「科学」的であるために用いた方法を解説する。ミレイの《オフィーリア》やラスキンの肖像画、ウィリアム・ダイスの風景画《ペグウェル湾》、ウィリアム・ホールマン・ハントの《良心の目覚め》、《雇われ羊飼ひ》、ロセッティやハント、またウィリアム・ロセッティの詩作などを取り上げ、これらに表現されているのは科学的観察の正確さを芸術でも実践できるという自負だけではなく、科学的基準の援用によって芸術は道徳的な目的をより効果的に表現できるという信念だったと主張する。

第二章は生態学をめぐる議論である。初期ラファエル前派の詩、ラスキンの散文、ブレットの風景画などを取り上げ、動植物を生態学的に正しく描写することによって祝福する態度と、生態学を中心とする自然史概念の関係性について解説する。ミレイの《樵の娘》やハントの《我がイングランドの海岸》などを分析し、動植物に対する生態学的な見方が、生態学が科学として認定されるかなり以前から意識されていたことを示す。またフォード・マドックス・ブラウンやジョージ・プライス・ボイスらの風景画を分析し、近代化の中で人々の道徳的、心理学的な安寧が、いかにエコロジカルな環境基盤に依拠しているかを表現していると主張する。

第三章では、歴史的絵画における心理学の援用へと話題を移す。心理学の初期の時代、人相学や骨相学を含む解剖学が心の科学として認知されようとしていた時期にラファエル前派が活動を開始したことを踏まえ、ミレイの《イザベラ》やハントの《プロテウスの手からシルヴィアを救い出すヴァレンティン》、また聖書物語の視覚化、さらにロセッティの詩作等を取り上げ、人体や表情の緻密な描写による心理表現が、いかに作品に真実性を与えているのかを解説する。

第四章では、宗教的なテーマと「科学」的技法の関係を考察する。1850年代、リベラルなキリスト教徒の間に「科学」が信仰の助けになるという考えがあり、これが新しい聖書研究へと結びついた経緯を解説する。ミレイの《両親の家のキリスト》の成功と限界について考察したのち、ハントの《贖罪の山羊》、《寺院で見出された救世主キリスト》などを取り上げ、キリストの生涯と時代考証において、どのように考古学、自然地理学、自然史学、民族誌学が援用されているかを考察する。

第五章では一転して建築に目を向ける。1854年に始まるオックスフォード大学博物館の建設に焦点を当て、ラスキンの建築理論に裏打ちされたゴシック・リバイバルとしてのこの建造物が、ラファエル前派芸術家と科学者との協働作業の賜物であり、その総体が「自然神学」に基づく表現のモデルとなったと考える。ゴシック建築の様式と新しい材料である鉄との合体は「科学のモダニティに対する大胆な肯定」であること、エドワード・ウィーランやオシア兄弟の柱頭の装飾彫刻、さらにトマス・ウルナー、ジョン・ルーカス・タパー、アレグザンダー・マンローらが製作し館内に佇む科学者の彫像群が、生態学的なヴィジョンを表現し、同時に科学的視点と想像力の象徴になったとする。

後半の最初である第六章では、まず進化論の出現による「自然神学」から「科学的自然主義」への移行の状況について考察する。進化論以後、「自然神学」において「科学」とキリスト教的前提は相互補完的でありうるという考えから、両者を切り離す考え方に移行していったが、ラファエル前派第一世代はこの問題に対して葛藤を抱えていたと見る。ロセッティが唯美主義と象徴主義に向かった経緯を検証し、「科学」との決別は完全なものではなく、《ヴィーナス・ウェルティ・コルディア》などの唯美主義的な女性像にも実は心理学、園芸学、動植物学への信奉は見取れると指摘する。またエドワード・バーン＝ジョーンズの《創造の六日目》、《運命の車輪》なども、ウィリアム・モリスも言うように、神話の世界のグロテスクでかつ想像力溢れる表現の背後には、第一世代と同様な「科学」的観察に基づいた理想があるとする。結局、第一世代の芸術的原則は、「自然神学」と「科学的自然主義」の両方の要求から引き起こされたものだったということ、そして第二世代はどちらの見方も放棄し、科学をモデルとする芸術という

理想から離れてしまったかに表面的には見えるものの、実はその理想が第二世代にも受け継がれているのだと主張している。

第七章では、「進化論」以後、キリスト教が約束するものが無効となった世界で、人生の意味を支えることに第二世代のラファエル前派の詩がどのように貢献したのかを検証する。『フォートナイトリー・レビュー』誌上に掲載されたアルジャーノン・スウィンバーン、ウィリアム・ベル・スコット、ジョージ・メレディスらの詩、中でも読者に歓迎されたモリスの詩『地上の楽園』を検証している。表面的には科学に対して敵意を持つかに見えるこの詩が、いかに「科学的自然主義」に根ざしているのかを示す。同誌に載ったロセッティの詩も、科学を批判しているように見えて、いかなる真実も聖なるものではなくいかなる科学も究極的なものではないという「科学的自然主義」の信念を再確認していると述べる。

第八章では、第五章のオックスフォード大学博物館から遅れて、サウスケンジントンに建設された大英博物館の分館としての自然史博物館の建築様式に関する論争に焦点を当てる。自然史博物館は反ダーウィンのリチャード・オーウェンと、ラファエル前派とつながりの強い建築家アルフレッド・ウォーターハウスの協働で建設されたが、そのデザイン理念としての「自然神学」に対する世間の見方が建設時期の遅れた間に微妙に変化し、すでに「科学的自然主義」に傾いていた科学雑誌『ネイチャー』から批判を受けたという事象について解説している。

「追想」と銘打った第九章では、1880年代に第一世代ラファエル前派の生き残りの老画家たちが描いた作品、ハントによるオーウェンの肖像画、ミレイによる鳥類学者ジョン・グールドの絵、そしてブラウンによるマンチェスター・タウンホールの壁画群を取り上げる。そこにミレイやロセッティが一旦放棄した若かりし頃の理想と「自然神学」へのノスタルジー、そして「科学的自然主義」への皮肉が微妙な形で描きこまれていることを指摘して、ラファエル前派の第一世代の理想を再確認して論を終えている。

要約が長くなったが、それほど扱う作家と作品、学問分野、資料や先行研究への言及が多岐にわたり、情報量も多くなっている。本書はこれまでと全く異なる視点からのラファエル前派の理解方法を示したという意味で斬新であり価値が高い。読者としては関心のある作家や作品、あるいは学

問分野の部分を繋いで拾い読みしても色々と役立つ情報が見つけれらるだろう。しかしそれぞれの話題が少々拡散気味なところもないわけではない。当時の科学が発展途上であり、ある意味で似非学問的であったことを考慮したとき、現代科学の専門家から見たらどうなのかということも気になる。ダーウィニズムのポストコロニアル的な影響とか、芸術と写真等の新メディアとの関係など、さらに深めて行けるテーマが数多く含まれているように感じた。

—— 県立広島大学教授